第5号
＝通算55号＝
（12月号）
2017年12月1日
発行：滝田衛

七里が丘こども若者支援研究所

今を生きよう みんなOK！

第2弾 権利と義務はコインの裏表か

9月号の巻頭テーマを再考したい。結論は、21世紀にバラ色の未来を描くのは困難。市民は未来を創造し得る営みを共に進めること、政治をあきらめずに。なぜならば、新自由主義という「富める者はより富み、貧しいものは貧しいまま自己責任」－消費資本主義(末期的)―が20世紀末世界を徘徊し21世紀を迎えたから…なのだ。

“自由”は人類史上の究極財産。市民一人ひとりの自由の保障のために社会は“契約”を結ぶ、それが法律であり憲法＝「法の支配」でした。法の支配こそが人びとの自由を保障する。憲法は国家権力からの自由を市民に保障するもので、市民の自由を縛る憲法はない。「法の支配」とは国民を支配することでなく、市民を代表する権力者(現代では首長や議員)への支配である。幕末の志士、坂本竜馬も言及した。世界史的には17世紀、国王の権利を制限し奪取する市民革命として胎動した。

11月19日長谷川ひろみさん
横須賀メルキュールホテルロビーの展示　パリ博での作品
20日からは市役所で展示

ここからが本題。11月に関わった若者を紹介する。大学を出て就職、短期で職を変えながら体調不良、労災申請？と悩みつつ26歳で仕事をやめた。親が心配し新聞報道で知ったNPO法人に相談、医療を受診し“統合失調”と診断、27歳だった。家庭療養と通院･入退院し14年経った時、働いていた60代前半の父親が急死。母親は今後の生活不安から、初期のNPO法人との関わりで本研究所に相談を持ちかけた。

働いていた20代の若者は厚生年金を支払うが国民年金未支払があり“障がい基礎年金“の請求ができない。”精神障がい者福祉手帳2級“を持ちながら春より”障がい者自立支援“未申請だったので医療費･投薬代が１回数10万かかり驚きです.。o〇わ

ここで問題です。父親は働き、若者も働き税金を納入していた。若者は厚生年金を払っていたが国民年金はマダラナ支払いだった。この若者の社会的支援の現実は…？

“障がい基礎年金”の支給はありません。税金と国民年金は連動せず年金支払いは自己責任だから。“障がい者自立支援”は申請し直します。もちろん市役所･年金事務所に責任はない、が同席した僕は職員のクールな事務手続き感プンプンに「市民、ましてや穏健な親は頭を下げるしかない～」と痛感。しかし改めて年金申請をします！！

無知！自己責任！そうではない、”他人事(ひとごと)“ではないのです。全国働く人の3分の1、約2000万人は派遣･パート･アルバイトの雇用形態。月給20万～8万前後、年金･社会保険･民間保険等を支払う人。もちろん税金は払っている？　取られている感！　僕の場合、ひきこもる若者の年金･社会保険の支払い、老後を迎える保護者の不安が課題でもあるのです。勤労、納税、教育の義務が権利(基本的人権、労働権、教育権)に反映していない。憲法第25条「健康で文化的な最低限度の生活を営む権

利を有する」は他人事、結婚ナシ、貯金ナシ、家ナシ、仲間ナシ…ナシ(梨)？と冗談を言っている場合ではない。更に子ども食堂や学習支援は喫緊の課題、街場で民官が支援を始めています。また老齢年金がない、あっても約5万円の高齢者の現実もある。家、水道･電気･光熱費、更に語り支え合える仲間はどこに？　推して知るべしだ。

　権利と義務はコインの裏返しではない。権利は権利である。義務は人間不信社会そのもの！　不要の長物。学校へ行かない子ども、社会で働かない若者は「生きていてはいけない人間」と社会圧の真っただ中で自己を否定する。先の若者は社会参加していたが社会的支援を受け取れない。“義務”という名の選別を僕は21世紀の近い未来に一掃したい。我らが誇る書道家：**長谷川ひろみさん**の“絆（薔薇）”に未来を託して。12月2日、あの京都：清水寺の展示＆セレモニーに出席です　凄すぎる長谷川さん(滝田)

それぞれの風

○11月18日(土)　西鎌倉地区教育懇話会で「教育支援の現場から見える鎌倉の子どもたち」をテーマでお話をさせていただきました。地域で子どもたちの育ちに関わり、いつも素敵な刺激を頂いています。今回も幼児を抱っこした父さん、お子さんを連れたお母さんも参加して(いいですね！)、自治会･子ども会･民生委員･青少年育成委員等々の参加で有意義でした。司会の日高さんのまとめを紹介します。

寛容なまちをつくる　西鎌地区教育懇話会副会長日高保さん

　滝田さんのお話は、その内容もさることながら、いつもニコニコ、その人となりを見ているだけでいやされるような気がします。その滝田さんが、大人の姿勢として大切なことの一つは「寛容」、と紙に書いて掲げると、本当に説得力があります。ではなぜ「寛容」な姿勢なのか。子どもたちの成長は、いや大人たちもだと思うのですが、一直線に右肩上がりに進んでいくということはなく、上がったり下がったり、その過程で凸凹しながら、長い目で見れば上に進んでいく、らせん状に昇っていくイメージです。上がっている時はともかく、下がって悩み、もがき苦しんでいる時、その状況を自分ごとのように受け入れ、それを大人の経験や価値観で諭すのではなく、寛容な姿勢で周りの大人がサポートすることが大切だということだと思います。…中略…その言葉は、とくに現役子育て中のお母さんたちの胸に響いたようで、身近に不登校の子がいる方は、「なんでなんで」ではなく、その子の思いに共感して、包み込むようにサポートしていこう、という感想も耳にしました。…中略…子どもたちをサポートするのは「親」だけではなく、地域の大人たち、という環境づくりが大切で、そうしていくためには、地域の大人たち同士が「お互いさま」と、頼り頼り合える関係を作っていくことを提案されていました。…西鎌倉地域は、先輩方や学校の先生方によりその土壌が作られていると思いますし、また懇話会が引き続きこうした場を地道に設けていき、その土壌をさらに豊かなものにしていきたいと思います。(ブログ blog 西鎌発　地域ぐるみで教育を考える　より引用)

http://blog.goo.ne.jp/nisikamakonwa/e/7fb2b8b2eb2b3bad880063c6e40a02e0

○11月応援団会議参加は22人。新しい方も2名、久しぶりの方もいて濃厚な時間を過ごすことが出来ました。お孫さんの話題、障がいを生きる希望、不登校と学びの変化成長、ひきこもりの幸福感＝人とかかわる、応援する、事業を進める展開で…。参加者の声に「悩みの回答」が、顔を見合わせることで「明日への願いを」と。では12月も💜

イギリス生活　心理学の学びから考える教育＆心理の巻　No1

僕は2004年　学校心理士＆発達臨床心理士　の資格を取った。極端に米国化した日本社会、心理学・セラピー・カウンセリングは必要と考えた。反面、効率的で合理的なセラピーは子ども若者を追い込むと懐疑的に13年歩んできた。受容のカウンセリング、専門的診断を求めるカウンセラー、当事者性を失うセラピストでいいのだろうか？と。

もちろん僕自身がカウンセリングの長期化を許容、お節介な家族療法をすすめ、生活・障がい福祉行政や医療介入ソーシャルワーク、そして働きたい若者への就労支援でハローワク・事業者を訪問。そこで反省的にバンガ―大学へ学びに出かけてみた…

社会課題の理解と共感の心理学を

子どもたちの健康を追究する授業を進める女性Dr　Mihela Erjovec(写真右)は、日常化したファストフードと学校Lunchを問い、野菜と果物をいかに提供できるかと講義を展開する。乳幼児期から食への欲求や変化について解説、学生は適宜発言していく。教授とのやり取りが実にスムースに進む。映像を入れ食の好き嫌いについて触れながら、フルーツと野菜の重要性と現代社会・家庭が抱える問題点、子どもの欲求？　肥満？　社会の価値観？等などとのせめぎ合いを解説しながら、学校のランチ提供の問題を取り上げる。Changing school food Jamie Oliver の取り組みを紹介し、どうやって子どもたちの健康的な食を提供でできるのかの改善策について講義を深めていく。僕は、Changing children's eating choices での　3つの観点に着目した。1.make contact with child psychology 2.demonstrate strong evidence base 3.actually change behavior　語り口調、そのテンポ、そして学生とのやり取りに感心させられた講義でした。

Approaches and Therapies を講義する女性Dr Fay Short(写真右) は様々な心理学の手法を問い整理しクライエントのニーズに合う手法を追い求める。教室に入っていくが誰もいない。ウロウロしていると学生が集まってきた。一番後ろの席に着くとDrが入ってくる。挨拶に行くと気さくに握手をしてくれた。今日は初日なので、　Modules and Asecements　講義全体のスケジュール説明。講義構成が1～3時のレクチャー、3～4時のお茶を持ち寄ってのグループディスカッション、2部構成になっていると解説。評価について説明、プレゼンテーションと論述テスト1000文字、レポートのつくり方と論述方法など細部にわたって要求が高い。例えば、資料分析のPCアクセスに失敗した時の対応、テストを受けられなかった時の対応、論文の視点が everything ではなく one point original idea であること等々。学生は聞きたいことがあると、手を上げる生徒もいるが、自由に会話をしていく。先生は「後で！」とは言わないし生徒も待ってはいない。お互いに気づかず遅れた質問になると、「ごめんさない」「気がつかなくって」と気配りし質問と答えを優先する。英語でのやり取り、雰囲気は理解できるが詳細は

チンプンカンプン(笑)。20人弱の講義、話の途中で「今日は見学者がいる」とDrが紹介し学生が笑顔で振り向く、笑顔を返した。PC で講義内容をチェックする人、壁に寄り掛かかり傾聴する人、それも自然体。すべての学生が Dr を注目し聞く。居眠りなどない(凄い！) 対等な関係に新鮮さを実感する。Drへの学生の敬意は基本の基と感じた。

少年犯罪の予防を講義するDr Simon Viktor(写真下)は社会環境、イギリスの階級と居住地を問い直し子ども若者の成長を求める。今日は大教室、150人近くの学生たちは賑やか。「シー」と両手を広げるポーズをDrが取ると、学生は静粛になり授業は始まった。とっても穏やかに話を進める方でした。ここも最初のガイダンス、やはり評価を細かく解説する。充実した学びを求めている。次の週にミーティングを持っていただくとは思っていなかったが、とても親近感ある授業だった。

後日ミーティングが実現した。そこでのインタビューで得たものを整理する。「少年犯罪や薬物の現状が社会では理解されず支援の仕組みが十分でない。スエーデンでは進んでいるが充実した取り組みがイギリスにはない。だがソーシャルワーカーやカウンセラー、

ユースサポートの関わり方はある。一方で生活保護家庭の連鎖が大きく、地域でも貧困層の定着場所が存在し貧困の固定が大きい。一方ゲームやソーシャルネットワークでなかなか改善が望めない子ども若者もいる。(子ども若者の親の会を月例で実施している発言に)バンガ―大学のプログラムで“ペアレントティーチングプロジェクト”が始まっていると。(不登校やひきこもりの日本の現状を問うと)日本社会特有の現象。親が子の面倒をみないイギリスは社会的自立が早く親も関わらない。一人親家庭でも生活保護で生きていくことができる。親が世話を続ける日本社会の特徴と。(今後の貧困はどうなるのかと問うと)イギリスから見ればアメリカの貧困は酷く、最下層の下にさらに最下層の人たちが生まれている。イギリスの20年後かもしれない。でも、日本と同じように大学を出てもスパーで働いている人がいるのは悲しい(表情が印象的)」と。最後に教育と心理の意義を質問すると「私は30歳までエンジニア、大学で学び直し心理の世界に入りDrに。教育の意義を十分理解、また大学で妻 Dr Mihela Erjovec(**P3の方**)と出会ったことも(笑顔が最高でした)」。壁に貼られた卒業生からのメッセージが熱かった。続く

12月予定 6日(水)15:15～ 講演:県中地区教組養護教員 in 平塚市教育会館
11日(月)10時～ 講演:中学進学に向けて in 大船小学校ことばの教室
18日(月)15:30～ 講演:発達障害の理解と支援 in 横須賀市鷹取小学校
19日(水)19時～ 委員:県小中一貫教育推進会議 in 神奈川県民センター
23日(土)14時～ **子ども若者応援団会議** in 横須賀市市民活動センター
定例仕事場 ○深沢Largo(フリースクール):7(木)、9(土)男子会、16(土)
○鎌倉市教育センター :5(火)、12(火)、15(金)、19(火)、20(水)、26(火)、27(水)、28(木)
○研究所でのご相談はお休みしています。**お問い合わせは受け付けておりますが？**

発行編集責任者:滝田衛住所:鎌倉市七里ヶ浜東2－31－12
連絡先:090－7212―4055 メール:qq5656r9@happytown.ocn.ne.jp